

「大阪編」

僕のノスタルジック大阪

朱川湊人 小説家



僕は大阪の下町、天満で五歳まで育った。壁に不思議な絵が描かれた、まるで怪人二十面相のアジトみたいな雰囲気の家に住み、路地裏にはいつも近所の子供たちが集まり、ベッタン（メンコ）の腕を競い合った。日本一長い商店街・天神橋筋商店街も遊び場だった。

祖母が住んでいた鶴橋にも、よく遊びに行った。当時はまだ高層ビルもなく、鶴橋の歩道橋から大阪城が見えた。あの頃夢中になっていた『ウルトラマン』で、怪獣が大阪城を壊してしまうシーンを観たあと、街並みの向こうにたたずむ大阪城を見つけ、「あるやん」と安堵した記憶がある。

テレビといえば、忘れられないのは『パルナス』のCMソング。日曜の朝、アニメの時間帯に流れるお菓子のCMなのに、哀愁漂うメロディが印象的だった。おかげで僕は『小さい秋みつけた』とか『船頭小唄』とか、妙に物悲しい歌が好きな少年になってしまった。

東京に移って二年後、一九七〇年の大阪万博には行きたくてたまらなかったが、連れて行ってもらえなかった。それだけになおさら、憧れが膨らみ、僕にとって大阪は「キラキラしたもの」になった。

といっても僕のキラキラは、別にきれいなものじゃない。むしろ惹かれるのは、僕自身の原点である下町の風景だ。例えば、公道なのに信じられないほど狭く、車でも来ようものなら忍者のよう壁に張りつかないといけない路地。家と家が近く、二階から見ると屋根がぎっしり寄り集まって屋根から屋根へどこまでも飛び渡っていきそうな家並み。日本第二の都市なのに、そんな懐かしい「昭和の風景」が今も残っているのが大阪の魅力。まるで子

供の机の引き出しみたいに、いろんなものが詰まっている。そういえば大阪人は、お好み焼きとかオムライス、ミックスジュースとか、混ぜ合わせた食べ物を発明する名人だ。合理的でアタマが柔らかい証拠だろう。

今の世の中、世界中が詰まったパイプのように、出口を探して喘いでいるが、こんなときこそ、明るく軽く柔らかに、人生を肯定的に楽しむ大阪人気質を生かしてほしい。五歳で大阪を離れた僕も、お笑い好きで、お調子者なところは紛れもなく大阪人。これから折にふれ、キラキラを探しに大阪へ「帰り」たい。

躍



しゅかわ みなと 小説家

1963年大阪府生まれ、5歳から東京育ち。慶應義塾大学文学部国文学科卒。出版社勤務を経て、2002年『フクロウ男』でオール讀物推理小説新人賞を受賞してデビュー。2005年、1960年代の大阪の下町を舞台にした『花まんま』で直木賞受賞。他の著書『白い部屋で月の歌を』『都市伝説セピア』『さよならの空』『かたみ歌』『わくらば日記』など。

作画：田坪良次 京都市立芸術大学名誉教授；大阪人間科学大学教授（環境デザイン）